双葉葉通信【第９９回】“ふくしまの切捨ては許さない”　　20200501

上　田　　勉

人間の歴史はパンデミックとの闘い

「人類の歴史は、感染症との戦いの歴史でもある。人が免疫を持たない病原体はときに爆発的に感染を広げ、社会を大きく揺るがしてきた。

パンデミックで有名なのが、欧州で14世紀に大流行した「黒死病」（ペスト）。欧州の人口の3分の1を失い、封建社会の崩壊や宗教改革の一因になったとされる。20世紀初めの第一次世界大戦中にはインフルエンザの「スペインかぜ」が流行。米国から各国の軍隊などに広がった。第2波、第3波と発生し、世界の死者は数千万人とも言われる。パンデミックにはなっていないが、致死率の高さから恐れられているのが、1976年にコンゴ民主共和国（旧ザイール）やスーダンで見つかったエボラ出血熱。アフリカで繰り返し流行し、2014年に再燃したときは1万人以上が亡くなった。

コロナウィルスも以前から脅威になってきた。02年から流行した重症急性呼吸器群症（SARS〈サーズ〉）もその一つ。やはり中国で初期の感染が起こり、アジアなどで約800人が死亡。12年に見つかった中東呼吸器群（MERS〈マーズ〉）では、中東諸国を中心に800人が犠牲となった。

日本の歴史にも感染症の爪痕が残る。奈良時代には天然痘が大流行し、政権を担った藤原四兄弟が全員死亡。戦国武将の伊達政宗が片目を失った原因も、幼少期に患った天然痘だと言われる。

コレラもたびたび流行した。日本医史学会の機関紙「日本医史学雑誌」には、江戸時代の1858年からの流行は、開国後に長崎に入港した米国船の感染した乗組員がきっかけで、江戸だけで26万人が死亡したと書かれている。

新型コロナウィルスは4月28日時点で、世界全体の感染者数が300万人、死亡者が20万人をそれぞれ超えており、100年に1度のパンデミックの様相となっている。（本間沙織・半田尚子）（「朝日新聞Globe」2020年5月付け　№229）

◇韓国 米軍のための軍事費（不要不救）削り国民に支援金―F35ステルス戦闘機など

◆日本　1人10万円の現金給付 補正予算約13兆円は赤字国債―将来の国民が負担

「韓国国会は30日未明、新型コロナウィルス対策として全世帯に支給する「緊急災害支援金」の財源確保に向けた第2次補正予算を可決しました。軍事費9,897億ウォン（約850億円）の削減などが行われ、総額12兆2千億ウォンが支援金支給に投入されます。削減された軍事費は、F35ステルス戦闘機（3,000億ウォン）、海上作戦ヘリコプター（2,000億ウォン）、イージス艦（1,000億ウォン）などの事業で、今年の支払いの一部を先延ばしするなどしました。韓国政府は、今月中旬までに全2,171万世帯に支給するとしており、単身世帯で40万ウォン（約3,500円）、4人以上世帯の場合は100万ウォン（約9万円）となります。急を要する生活保護世帯などには4日か

ら（可決から 4 日間で）支給される予定です。」（「赤旗」2020 年 5 月 1 日付け）

【医師シュナーベル・フォン・ローム（ドイツ語で「ローマの嘴の医者」）を描いたパウル・フュルストの版画（1656 年）。（**‘Vos Creditis, als eine Fabel, / quod scribitur vom Doctor Schnabel**（→君は寓話と信じるだろう/嘴医者の物語を））が添えられている　出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』】（長い鼻の中には薬草が入っている）

【ステルス戦闘機は 1 機 100 億円、日本は米国から 100 基を買う（計 1 兆円）―安倍首相がトランプ大統領に約束―1 兆円は 1 人 10 万円の特別交付金 10 万人分になる】